

1. 息子の交通事故

17年前、高校3年生

意識不明の1ヶ月 →命は助かる →名前を言う →食事ができる →一人で歩く →4ヶ月後 退院

●変わった息子へのとまどい

退院はしたものの・・若いのに・・怠けている？

- できごとや予定が全く覚えられない
- 何かをしてもやり方がわからない
- 食事、遊びにも意欲がない
- テレビを全く見ない
- 知っているはずの場所で迷う
- 突然、感情的になり怒る

障害を分かりあえない！

●家族は・・・「本人に早く元気になって欲しい」

（育て直しや教育の意識）

- ・脳のリハビリを！
- ・社会的なルールを守って！



■本人は・・・なにが問題なのかわからない

- ・何度も注意され、時には反抗・暴力も。
- ・自信を失い、不安定な行動・うつ状態

2. 情報と活動場所を

孤立し、不安の中で
全国の高次脳機能障害者家族会を知る

☆ 支え合う仲間がほしい！

◆ 2001年6月 16家族で集いを始める

◆ 2002年家族会設立

高齢者や障害者の在宅生活を支援している
社会福祉法人「地域(まち)でくらす会」の支え

◆ 2003年～ 鳥取県からの補助金確保

高次脳機能障害者を支えるしくみが皆無

全県で**家族会が支援をおこなってきた**

啓発事業

理解者を増やす

1. 定例会（県内3ヶ所・本人と家族が参加）
2. 講演会・研修会
3. 会報・資料の発行



勉強会

定例会（ピアカウンセリング）

相談事業

訪問・仲間をつなぐ

1. 携帯電話による相談
2. 訪問による相談
3. 相談センター「こりん」
毎月1回まちなかに開設
発達障害など何でも相談可能

反省：昨年までは、週1回会員同士が見守る活動として行ってきたが、精神的に不安定な人や病状が悪化していく人は、ボランティアの支援ではむずかしい。より専門的な支援者が必要。

3. 訪問と面談（信頼をつなぐ）

【訪問】

鳥取県の職員（主に保健師）が、高次脳機能障害者の支援に際し、家族会との同行訪問を始める。それによって、訪問・聞き取り・連携などの技術を学ぶ。現在は単独訪問も多い。

①病院・施設・行政への訪問

- ・・医師、相談員、保健師などからの紹介。
受診や高次脳検査の同席も行う。

②自宅への訪問

- ・・県、市町村の保健師や包括支援センター、
障害者支援センター相談員との同行もある

訪問することの重要性

- 生活の場は感情を率直に伝えやすい
- 本人の状態、家族の関わり方を確認できる
- 何気ない話の中で、問題として意識化されていない点に気づき、対話することで理解しあえる

家族会は

★生活や介護の様子から

相談者がかかえている問題に気づく

★当事者家族として寄り添い続け、

家族全体を支えることを伝える

4. 具体的な支援

- 電話で本人、家族の思いを聞く
- さまざまな情報を提供する
- 動きを指示し、支援先に連絡する
- 同行する
- 支援会議で話し合い、役割分担する

(自分の家族のこと・家族会の事務・研修会講師など 調整しながらやってきた10年)

長期の支援が必要な場合

- 本人が一人暮らし
- 就労や人間関係で何度も失敗している
- 家族に手続きする能力が無い
- 家庭内で本人が被害者になっている
- 家族関係が混乱している
- 本人が亡くなった後の家族のケア

★家族の抱えている日常的な問題の解決、
生活支援にもかかわる

医療・生活・就労への同行支援

- 診断、リハビリ （医療機関）
- 契約の確認、立会い、書類の手続き
賠償や労災 （労働基準局・弁護士）
自立支援医療 （病院・役所）
障害者手帳 （病院・役所）
障害者年金 （自宅・病院・社会保険事務所・
役所・損害保険会社・損保関係）
- 就労 （就労支援センター）
- 債務処理 （弁護士事務所・役所・銀行）

そのほかの支援

- 人間関係の問題
- 日常的な衣・食・住について
- 家族や親族と、障害の状態、経済生活についての話し合い。
- 生活保護の相談
(障害者生活支援センタースタッフと協力)

人間関係や生活相談は多岐に渡り しかも長期になるので関係機関にもつなげていく

5. 家族会で支え合おう！

助かった命、人生の再構築を！

☆変わっていく当事者と家族☆

本人

- 自分の思いを伝える
- 人の意見に耳を傾ける
- 制度利用の情報交換
- 障害への対応策

(メモリーノート)などの紹介

家族

- 始めは涙の出会い
- 何度も気持ちをはき出す
- 一緒に考え聞き合う
- 体験からのアドバイス
- 行政などへ同行支援

活動の成果と問題

☆ 家族会が中心になってきた**成果**

関係機関との連携が強くなった

本人・家族が生きるチカラを問い直し、
意欲的になっていく

★ **問題**

支援を継続して行える人材がない

他の活動団体との結集が弱い

事業展開の難しさ

- ①県全体の高次脳機能障害者が少なく、それぞれ状態・ニーズが異なるので、事業所にまとめられない。
- ②今の福祉事業は営利を考えねばならない。
会員の多くが現役で働いており、生活を支えるほどの事業展開を家族会がやっていくことは難しい。
- ③事務局である社会福祉法人『地域(まち)でくらす会』に
障害者生活支援センター・就労支援事業所(B型)・生活支援事業所
介護保険でのディサービス・ショートステイ・認知症対応型事業などがある。現在利用者も多い。

目的:鳥取県に合った生活支援システムを作ること

地域の事業所を高次脳の方が利用されることによって理解者が増え、誰でも使える事業所が継続される方がいい。